

現代キューバにおける「人種」と「歴史」 ——有色人独立党の反乱（1912）を巡って

岩 村 健二郎

はじめに

本論の原初的な問題関心は、「人種主義」にある。「人種主義」を問題関心とするなら、近年欧州で起こっている「移民問題」への対応としての排外主義や、米国の次期大統領トランプ氏の「放言」を可能ならしめているものとの関わりなどが、より一般的な喫緊の問題として想定されるであろう。とりわけ近年日本において「ヘイトスピーチ」という語によって対象化されている行為についても、「関心」の外として済ますわけにはいかない。「ゼノフォビア」といった単語で語られることもあるそれら嫌悪、排斥行為は、社会集団としての自己と他者を弁別する自他論を同一性の根拠とし、その弁別性を所与のものとして前提化して自他を構成する本質主義に特徴づけられる。こうした社会集団における自他論として近代において最も強い影響を保持してきたのは言うまでもなく「人種主義」であり、近年の世界的排外主義も当然のことながら人種主義がいかなる偏差をもって現れているのかを抜きに分析することは無意味である。ところが「人種」が概念として破綻しているという科学的見地からの事実がありながらもわたしたちの日常生活における言説から「人種」はなくなるどころか強い影響力を保持していること、またそれが審美的価値観と結びついた価値の体系を作りながら自己を包摂する「人類」全体の構造、ヒエラルキーを仮想させ、つまりは「世界全体」のイメージを喚起する力があることなどから、集团的自己と他者を区別しようとする

現場においてわたしたちはなかなかその力を排除できないでいる。

わたしたちは日常、「人種差別はよくない」といった判断を倫理的、道徳的な思考として首肯している。しかしこの思考には、「人種“による”差別はよくない」という見地と、「人種“という”差別はよくない」という見地が混在しており、現在でも前者の見地からの判断が多く行われているのではないだろうか。しかしそれは「人種」というこれまで歴史、社会的に構築され、現在も構築され続けている概念を、集団を規定することのできる自然化され本質化された所与の属性、人間を分類可能にする一つの基準として普遍的に通用できるものとして受け取っていることに他ならず、それこそが本来人種主義という概念が批判的に照射しようとしているものなのである。18世紀末に「人種」概念が生まれ通用してきた歴史と、「人種主義」が認識され問題化されてきた時間の長短がこうした事態を招いているのかもしれない。「人種差別」を批判しながら「人種主義」を延命させてしまっているような事態を、わたしたちはなかなか避けることができないでいる。排外主義に対する分析も同様に、それらをいわば「人種問題」の横溢として想定し、例えば「異人種」間の抗争であるとか、「他人種」の排斥といった枠組みで批判的分析を行おうとするならば、「言説の実定性」（酒井直樹）として機能してきた「人種」の構築性、歴史性の視座は反転し、人種主義を問題化しようとして試みていながら、まさに本質主義としての人種主義をなぞることになってしまう。さらには、歴史的な観点からは、もはや19世紀の分類法に依ることはない現代の人種主義は、あからさまな「人種」の弁別概念を用いずとも、「文化」「国民」「民族」などの自他の同一性の概念に横滑りを起こしながら、他に類を見ない強い拘束性を持った自他論の典型として、現代にその力を及ぼしている。そして、ましてやこうした歴史性、構築性すら脇に追いやる勢いで、差別言辞（とそのカウンターディスコース）の生産が様々な場所で行われているのである。そのため、「人種」概念や「人種」表象が、近代、とりわけ植民地主義以降に世界に播種されたことの一般論だけではなく、ある

特定の時間と場所において、「人種」がいかなる条件、経緯、ダイナミズムで社会的力を発揮するのかについての客観的、相対的分析の重要性はいや増している。

こうした原初的問題意識のもと、改めて特定の場所と時間において人種主義を捉え、人種概念や人種表象の意味を歴史化することの意義を見て本論は考察される。対象となるのはキューバにおいて1912年に起こった「有色人独立党 el Partido Independiente de Color (PIC と記す)」の「反乱」について生産された言説、とりわけそのセンテナリオである2012年を中心にキューバで起こった歴史的な再評価の議論である。わたしたちが現在目にすることができる PIC とその反乱に関する一次資料は、PIC が発行した機関誌 *Previsión* (1908-1910)、1910年を中心として多く行われた党員の摘発の裁判記録（例えば国立古文書にあるハバナ裁判所の予審記録や裁判記録であり、PIC が発行したビラや冊子、クーポンなどが含まれる）、同時代の新聞での報道や評論、反乱やその陰謀に際してのキューバ政府の米国との電文書等が挙げられる。しかし本論はそうした一次資料や、またはそれを使った歴史事象の分析を目的とするのではなく、PIC とその反乱を巡って生産された、そして現在でも生産されているメタ言説を分析対象とし、そこに立ち現れる人種概念の政治性、歴史性、社会性、いわば人種のディスコースの拘束力について分析しようとするものだ。

1 EcuRed による有色人独立党

本論では、対象とするPICの反乱が何であったかよりも、どう描かれたか、どう表象されたのかに重点を置くため、それが何であったかということをおろそかに自ら描くのは虚偽の議論になってしまう。ところが日本ないし日本語でこの歴史事象が書かれたことは数少なく、歴史書での概説の類すら欠いている現状では、例示すらままならない。それゆえ、一つの見地であるという留保をつけながら、キューバ政府が運営するインターネット百科事典であ

る EcuRed における、PIC とその1912年反乱の解説の要約をまずは例示したい。

有色人独立党は、独立戦争時解放軍で戦ったエバリスト・エステノス Evaristo Estenoz により創設された組織で、20世紀初頭、黒人と混血の人種差別に抗して戦うために作られた。この政党は武力による抵抗を計画し、1912年に反乱を起こそうとしたが、黒人と混血の虐殺に終わった。植民地キューバにおける400年以上の奴隷制の歴史から生まれた人種主義は、解放軍がスペイン植民地主義を打ち負かすその瞬間、北米が介入して独立をくすねたことで強化されてしまった。共和国は、「すべてのキューバ人は法の下に平等である。共和国はいかなる特権も認めない」と言及するのみの1901年憲法とともに誕生した。当時、解放軍全体の80%、將軍の14%、大佐の30%が黒人であったにもかかわらず、人種差別の遺制の問題にいかに対処し解決するかということは明確になされなかった。

反動的で、人種主義であったエストラダ・パルマ Estrada Palma の政府は無数の職権乱用を行ない、1906年8月に自由党が蜂起した。そこには多くの黒人のリベラルが参加したが、結果として彼らが望んだように人種偏見がなくなることはなかった。1908年8月1日の選挙では、地方議員や議員の立候補者の中から、リベラルからも保守からも、黒人は一人も選ばれなかった。こうした耐えがたき状況により、1908年8月7日にエバリスト・エステノスによって PIC はハバナのアマルグーラ通りに創設された。ホセ・マルティの「全員による、そして全員の利益のための共和国」の理想を党是とした。機関誌『プレビシオン *Previsión*』を1908年8月15日に創刊。当時最も先進的なものとして、労働権、市民権、国家主義、教育、そして農民へ土地を与えることという5つの目標を掲げていた。

PIC の成長を前に、モルーア・デルガード Morúa Delgado は、政界から PIC を追い出すために、1910年2月11日の上院で選挙法の17条に修正

条項を提出、「人種や富や職業上の資格や生まれなどに基づいた排他的な政党は、憲法と共和国の制度に反するものだ」とした。単一の人種や肌の色や社会階級による政党の存在を禁止するその修正案が1910年2月に上院で承認され、3ヶ月後国会で承認された。同日、エステノスと70人以上の党員が逮捕された。憲法に書かれている黒人大衆の平等の権利を実践しようとしたPICに対し、リベラル、保守の両陣営の政治家たちは、モルーア修正案の承認と同時に自らの「危機」を除去したのだった。しかしその弾圧にもかかわらず、PICは戦いを継続、修正案の廃案運動にとりかかった。その運動は1912年に頂点に達する。ホセ・ミゲル・ゴメスの政府はPICへの弾圧を強化し、4月に内務大臣のヘラルド・マチャードは厳しい摘発を始めた。

こうした事態に党委員会は多数決によって武力行動を採択。1912年5月20日に反乱。2ヶ月経たずに3000人以上の黒人、混血が虐殺された。多くはオリエンテ州だった。反乱は、「12年の戦争」とも知られる。最新の研究では虐殺されたのは5000人にのぼる。政府軍は12人が死傷。地方警備隊長であったホセ・デ・ヘスス・モンテアグードはゴメス大統領への報告書で「死者の数は正確に数えられません。戦場で山の中は肉屋のようになってしまいましたから」と書いている。主要な反乱はオリエンテにおいて行われ、エステノスらは粗末な武器を持って反乱軍を率いた。ビジャ・クララとマタンサス、ハバナでも反乱があり、殲滅された。

アメリカ大統領はすぐに干渉をちらつかせ、グアタナモのニベ湾とハバナ湾に駆逐艦を送り、オリエンテの米国人の財産を守ることを口実にして部隊を上陸させた。「これは米国南部の黒人たちに悪い見本だ」と米国の新聞ではかきたてられた。エステノス將軍ら反乱軍は逮捕され、1912年6月27日に処刑された。

(http://www.ecured.cu/Partido_Independiente_de_Color)

(2016年5月閲覧)

2 同時代のテクストーフェルナンド・オルティス (1910,1916) と『人種戦争』(1912)

同時代の知識人から“キューバ第三の発見者”と評され、キューバにおける「黒人研究」ないしは「アフロキューバ人研究」の創設者とも言えるフェルナンド・オルティス Fernando Ortis (岩村：2012) は、膨大な文化史、民族誌的研究を行うことによって、キューバにおける「アフリカ系文化」の価値づけ、歴史上の再評価に関わった第一人者として知られる。また1940年に『タバコと砂糖によるキューバの対位法 *Contrapunteo cubano del tabaco y el azúcar*』において文化接触による相互影響の概念「トランスクルトゥラシオン (Transculturación)」を導出し、1946年には『人種の欺瞞 *El engaño de las razas*』を著し「人種主義」を糾弾している。(岩村：1996 及び2007)

PIC が結党された当時、オルティスは「犯罪民族学」という独自のフィールドを開きながら知識人としてキューバの言論界にデビューし、最初の著作『アフロ・キューバのならず者—ネグロス・ブルーホス (犯罪民族学の—研究のためのノート) *Hampa afro-cubana: los negros brujos. (Apuntes para un estudio de etnografía criminal)*』(1906年) を出版した直後であった。この最初の著作において「アフロ・キューバのならず者」シリーズを予告していたオルティスは、4年後の1910年、エステノスをはじめとして PIC の党员たちが投獄された年に、「アフロキューバ人の反乱」というモノグラフを発表している。

キューバで人種主義がまた現実のものとなっている。それは悲しむべき現実である。一方では、黒人種の旗を振る寄生的な熱望が生まれている。それは本心ではなく、政治活動上の勧誘のためのへつらい、多くは慢心した、強がった下卑た野心による、衝動的でばかげた扇動行為である。そこでは

まともな金はなく、まがいものの硬貨が幅を利かせている。白人の側ではラテン民族の人種差別がキューバの福音であるかのように説かれ、それは北アメリカ人に対抗する形を取っていて、外から入ってきた「白人人種主義」の潮流にもかかわらずキューバで帰化証明書を獲得してしまっている。いずれの人種主義も我々の過去の、自滅的な分裂を象徴していて、我々は社会支配力が弱く、集団の力を政治的理想のもとに集結させるための統率力に欠けているのだ。黒人人種主義とスペイン人人種主義は、愛と憎悪の後遺症によって、我々の力を分断し、我々の未来を狭めているのである。(Ortiz 1910: 97-98)

ここでは彼は「黒人種」にも「白人種」にも人種主義があるという普遍的存在としての人種主義の考え方を披露し、キューバの「黒人人種主義」と汎スペイン主義を相対化している。また、注目すべきは以下の部分である。

キューバのすべての純粋な黒人による反乱には、長い間抑圧されてきた強い衝動性の爆発が見られる。しかし、それ以上のものはない。真の計画を欠き、指導するリーダーを欠き、他の奴隷たちの間の十分な反響もなく、攻撃のための武器や方法もなく、防衛も欠いていた。その無謀な企ては即時の鎮圧に終わり、一時の激情でしかなく、大したものにはならなかった。奴隷反乱が、他の国で非常に大きな成功を納めている時に、キューバにおけるそれはなぜ力を欠いていたのだろうか？しかし、キューバの黒人反乱が重大な結果をもたらさなかったのは、複数の社会的状況によって反乱が力を欠いたからであって、有色人たちが示した抵抗それ自体に原因があるのではない。彼らは革命ではなく抵抗を行った。それはとりわけロンブローゾが言ったように、革命という言葉は、反乱より広く社会的に重大な意味を持っているのである。(Ortiz 1910: 111-112) (下線は筆者)

このモノグラフは一部変更、加筆されて1916年に出版された『黒人奴隷 *Negros esclavos*』の一節となる。つまりこの変更、加筆は、1912年の PIC の反乱を跨いでいる。加筆された部分とは以下である。

エステノスと呼ばれる命知らずのえせ政治家によって率いられた多くの黒人たちが主にオリエンテで白人に対して反乱を起こした。しかしその常軌を逸した反乱は、軍隊によって屈服させられた。外面的にはそれは、有色人種の政治家モルーアによって作られた人種主義の政党を設立することを憲法違反として禁止する法律に対して、暴力で抵抗するものだった。(Ortiz 1975: 391)

さらには、上記の下線を引いた部分には、以下に示す太字の部分が1912年の反乱を跨ぐことによって加筆された。

しかし、キューバの黒人反乱が**人種主義的**に重大な結果をもたらさなかったのは、複数の社会的状況によって反乱が力を欠いたからであって (Ortiz 1975: 391)

PIC の反乱が、「人種主義的」という形容詞の“付加”をもたらしたと仮定すれば、それは同時代の知のあり方を示す一つの指標となるであろう。酒井は植民地主義の歴史と人種主義の一般論において以下のように述べている。

人種主義の分類法に則って主体を構成する排除された側の人間は、かえって、人類主義の普遍主義に対する特殊主義としての人種主義という相貌を、自ら選び取っているかのようにみえることになる。だから、人類主義の普遍性の建前を笠に着た人種主義者が、こうした「自己認知」によって主体を構制しようとする者たちを、人類としての共通性ではなく、人種や民族

の差異に固執する人種主義者と呼び、人種主義のその被害者に自らの責任を転嫁するような事態が起こるのである。(酒井 1996: 223-224)

新進気鋭の犯罪民族学者、科学の徒であったオルティスは、自らが対象化し分析する「黒人」の政治的行為を、「人種主義」であると認定している。PIC は同時代に、犯罪民族学という学術研究の知の領域においても「人種主義」と規定され、それを主導したのがオルティスであったことを差し当たりは記憶すべきだろう。

もう一点、反乱と同時代に示された認識として重要なものを挙げておく。それが、PIC の反乱直後に発行された『人種間戦争（キューバにおける黒人対白人）』だ。軍印刷所が発行したこの書物は、反乱の鎮圧部隊の武勲を称揚することを主要な目的とし、反乱直後に編まれたきわめて重要なメタ言説であるといえる。冒頭で述べられている献辞の宛先は、「人種主義革命を殲滅し、国内における無政府状態、外国の介入からキューバを救った共和国の英雄的士官」たちである。

この書物を出版する上での最初の我々の企図は、文学的研磨とでも呼べるものを行うことであった。しかしそれはこの戦争の様々なエピソードを曲げ、より不透明にしたり逆に装飾したりすることになりかねないと考え、あの激しい戦闘時に新聞が書いたような記述を排し、我々の読者がこの本に、人種主義革命の展開において起こったことの真実だけを見られるようにした。(Conte, Capmany 1912: 1)

見られるように、そうした立場から「真実」が目指されて、PIC の「人種主義」を位置づけている。同時代における統治側の認識の一つの例として考えることができるであろうし、オルティスのような学の知としての言説を、同時代において下支えしている立場、認識が示されていると言えるのではない

だろうか。

3 『PIC の歴史』(1950)

同時代の上記に対し、言わば PIC の当事者側から「真実」を追求する研究が1950年に著されている。著者で共産党の闘志だったセラフィン・ポルトゥオンド・リナーレスは、その父が独立戦争における指揮官であり、後に PIC の党員になって反乱に参加した人物だ。

セラフィン・ポルトゥオンド・リナーレスは早くから組合運動に関わり、1925年のキューバ共産党の結党に参加している。31年にサンティアゴ・デ・クーバの党の総書記となり30年代にハバナに出て活動、1936年、205か所の有色人「ソシアル・クラブ」を擁する黒人会連合（Federación Nacional de Sociedades Negras）結成に関わり、秘書となって人種差別反対の議員を応援する活動を行っている。40年代からはハバナで共産主義者組合を作り、44年から人民社会党で活動する。人種の権利向上、人種差別反対が活動の主要目的であった。50年に著した『PIC の歴史』で繰り返し述べられるのが「PIC は人種主義ではなかった」という点である。

有色人独立党が、自らの活動が人種主義と混同されないように、いかに注意していたか、その証拠を見てみよう（Poruondo Linares 1950: 269）

当時の、そして現在のわれわれ人民の進歩の敵対者たち、これら歴史的事実を知らないものたちは、悪意や無知からの評価にしがみついたままだ。しかし、歴史的な真実こそは道を開く。それは、有色人独立党員に帰せられてしまっている人種主義という誤った伝説を論破する。伝説は執拗に編まれ、市民権を求めた偉大な戦いに関わった黒人たちを、あやまちを犯した者たちの椅子に座らせようとした。しかし彼らは自らの義務を正確に遂行することができた。彼らが追求した市民の正義への熱望は、愛国的心情と

人間的なものから自らを遠ざけることはなかったし、それはすべての人がつくる祖国で、侮辱を受けずに、完全なる友愛をもって共に生きることを願うものであった。その場所は、人が同じ義務のもとで、同じ市民権を享受する場所だ。(Poruondo Linares 1950: 276)

「人種主義ではない」、平等、市民権を求めた戦いであった、という主張が繰り返され、そうした「真実」は歴史上歪められているという認識が示されている。そして重要な点は、この論は2002年に再出版されるまで、革命後のキューバでもほとんど取り上げられることがなかったことだ。後述するが、キューバ革命後すぐにでも評価されていてもおかしくなかったはずのこうしたPICの評価が、59年以降2002年まで触れられなかったということをまずは確認したい。

4 例外としての『キューバにおける政治と人種 1912年の小戦争』(1974)

1974年に、米国で教育を受け政府機関に勤務したキューバ系の研究者ラファエル・フェルモセジェが、『キューバにおける政治と人種 1912年の小戦争』をウルグアイで出版している。特徴的なのは、キューバの古文書ではなく、ワシントンの議会図書館の文書を中心に扱っている点、そしてとりわけ米国側に届いたキューバ政府関係者、さらには反乱当事者からの電文を参照している点だ。1998年の第2版出版に際し著者は、

(初版から2版まで四半世紀たっているにもかかわらず) 後続研究はほとんどなかった。人種問題は重要であり、キューバではなおさらなのにもかかわらずだ。加えて、現在のキューバではこの問題と似た人種衝突の要素が存在している。現在亡命している政治家たちにも、人種主義はある。(Fermoselle 1998: 12)

という問題意識を示している。後述する90年代に入ってから大きな変化を待つまで、革命以降はPICとその反乱についてほとんど論じられなかった。あるとすればウルグアイという「外部」で出版されたこの『キューバにおける政治と人種 1912年の小戦争』が唯一の例外であった、ということを改めて確認しておきたい。

5 決定的 PIC 研究 『キューバの黒人』(1990) と 「アフロキューバの抵抗：PIC 1908-1912」(1991)

PICを巡るナラティヴに決定的な変化が起こるのは90年代の初頭である。まずはホセ・マルティ国立図書館のトマス・フェルナンデス・ロバイナ Tomás Fernández Robaina 教授が、1990年に『キューバの黒人1902-1958』を著した。これは、タイトルどおり共和国期の革命前まで、つまりは米国の属国としてのキューバにおける「黒人」の歴史について述べられた、一つの「黒人史観」と言えるだろう。目次にはこうある。

- ・20世紀以前の黒人
- ・有色人団体中央評議会
- ・退役軍人と有色人団体委員会
- ・1902年から1908年の黒人の社会的状況と人種差別に対する戦い
- ・人種主義者だったのか、併合主義者だったのか
- ・PICの階級差別的分析のための素描
- ・PICにおけるマルティの存在
- ・1912年以降実際に人種差別は減ったのか
- ・“ある人種の理想”とその編者
- ・30年代の人種差別
- ・50年代の人種差別に対する戦い

・付録

- 1, 1901年憲法における4条11項
- 2, モルúa修正条項 (1910.5.14)
- 3, モルúa修正条項の、Lino D'ou による修正
- 4, モルúa修正条項破棄の提案
- 5, PIC 政治綱領
- 6, 有色人独立組織の設立書
- 7, PIC の年表

上記目次の「1902年から1908年の黒人の社会的状況と人種差別に対する戦い」は、1908年のPICの結党に至るまでの歴史的経緯が説明されており、「人種主義者だったのか、併合主義者だったのか」の主語はPICである。見られる通り、『キューバの黒人』で示されている歴史とは、PICの歴史とはほぼ同一である。PICに注視することによって、共和国期の「黒人史」の構成が可能になっているのである。

一方でPICの実証研究として最も進んだ研究を進めているのは、ジュネーブ大学のアリーヌ・エルグ Aline Helg 教授であり、フェルナンデス・ロバイナ教授に遅れること一年、決定的なPIC研究を発表した。それがピッツバーグ大学の学術誌『キューバ研究 Cuban Studies』に掲載された「アフロキューバの抵抗：PIC 1908-1912」（1991）であり、これを含めたモノグラフが1995年に『われらの正当な分け前：アフロキューバ人の平等への戦い 1886-1912』にまとめられた。独立戦争からPICの反乱までを一貫して「アフロキューバ人」の歴史として辿った決定的な実証研究であり、例えば第七章には1912年の反乱への対応が「人種主義に基づく虐殺」であったという認識が明示されている。

また、ハバナ大学出身で90年代よりピッツバーグ大学に拠点を移し、現在はハーバード大学の教授であるアレハンドロ・デ・ラ・フエンテ Alejandro

de la Fuente は、2001年に『万人のための一つの国家—20世紀キューバにおける人種、不平等、政治』を出版し、「30年にわたるスペインとの戦いと、4年にわたる米国占領後、キューバは1902年に正式に独立国家になった。キューバの解放のために戦ったナショナリストの連合体、黒人とムラートがほとんどだったその運動は、平等主義的な、ホセ・マルティが表現したような、“全員のための一つの国家”を求めている。しかし、キューバ共和国は、そしてその後のキューバ革命は、それらの期待に応えたのだろうか。」という問題意識に従って、共和国期、革命以降から現在までの「人種の政治」を実証分析している。

6 革命後の「人種問題」と PIC

知られるように、フィデル・カストロはキューバ革命によって「人種差別は撤廃された」と62年に宣言した。そして80年代後半においても以下の様な認識が一部公定的に示され続けた。

キューバにおける人種差別は、キューバ革命が勝利するまでのキューバ社会の歴史の一部なのである。キューバ革命が人種差別そのものを終焉させたからだ。(Serviat 1986: 166)

ところがソビエト崩壊後の経済危機の90年代に、個人営業が許可されたことや、海外の親族からの送金への依存度が高まった結果、「人種」による経済格差が顕在化し、ついには「撤廃された」はずの人種問題がなくなっていないことを政府が自ら認めるに至った(工藤 2010)。PIC 研究におけるこうしたリアルポリティークの「影響」を勘案することは重要であるが、まずはテクストの内在性において人種主義の扱いを見ていこう。人種差別の存在を認めたとされるフィデル・カストロの UNEAC キューバ作家協会での98年の発言が、2002年に書かれた PIC 研究、歴史学者カストロ・フェルナンデス

の『1912年有色人独立党員の虐殺』には引用されている。革命が成功した直後のフィデル・カストロの演説、「労働の現場における人種差別を終わらせるために戦わなくてはならない。あらゆる人種差別のなかで、最悪なのはキューバ黒人を仕事から遠ざけることである。二種類の人種差別があり、一つは娯楽、文化施設における差別、もう一つは職場での差別であり、最初にわれわれが戦わなくてはならないのはそれだ。」を引いた直後に、1998年11月のキューバ作家協会の第六回会議での発言を引用している。

前進と停滞について触れて最高司令官は「人種差別に関して起こったことは、近年多くが解決しているが、偏見という形で社会に現存している。文化全体は継承されるものであり、われわれキューバ人は良心を試されているのだ」と述べた（Castro Fernández 2002: 279）

とし、フランスのジャーナリストだったアルベール・ロンドルの「潰瘍を治すには隠してはだめだ」という金言をもって論を終えている。カストロ・フェルナンデスはこの書で、例えば、アントニオ・マセオ將軍の部下で、独立戦争での武勲を称えられているマヌエル・ピエドラ・マルテル大佐が、PICの討伐のための志願部隊を献金を募って編成したことや、エステノスの「虐殺」の当事者が、解放軍出身の黒人のサリオル大佐であったことなどを明らかにしつつ、全土に渡った反乱とその鎮圧の実際について詳細に調べ、「本書こそが、約100年後の視点から、正確に、そして冷静にその歴史的事件の真実を分析し、この間糊塗されてきたすべての虚偽的解釈や部分的、表層的分析から解放しようとするものだ」と謳っている。

そして、2007年に出版した『キューバにおける人種問題への挑戦』以来、人種問題の議論で中心的な役割を果たしているハバナ大学教授のエステバン・モラレス・ドミンゲスもまた、直前に書かれた論考において、PICを論じることによって現代の「人種の問題」を分析することから始めているのを

忘れるわけにはいかない。2006年の「有色人の挑戦」において彼は、

30年以上に渡る独立の戦いが終わったとき、黒人とメスティソのための政治的、経済的、社会的な空間を手に入れようとして、解放軍の元士官であり、有色人独立党の創設者であるエステノスとイボネがその最後の現実的な企図を実行に移した。知られるように、彼らは血をもって殲滅され、当時のゴメス大統領の子分に成り下がっていた解放軍のメンバー達によって「12年の小戦争」という悪い呼び名をつけられた。つまりかつてはスペイン植民地軍に抗して一緒に武器を持って戦った同じ仲間によって、そう呼ばれたということだ。当時彼らは、人種主義者であり、キューバに「黒人の共和国」を作ろうとしているとして非難された。スペインに対する戦いの間抑えられ、偽装されていた人種主義が一気に表に出てきたのだ。

人種主義者であるという非難は、黒人やメスティソが人種差別の問題を乗り越えようとするときにいつも振りかざされてきた武器なのであり、それは非常に長い歴史的背景を持っているのである。近年においてやっと、それは乗り越えられ始めたのだ。(黒人やメスティソを人種主義者と非難して、その人を混乱と当惑、もしくは恐怖の淵に陥れることは、過去そうだったようには今日ではもう簡単ではない。今日では人種の問題は明るみに出されている。長い間それは抑圧されていた。)

キューバ人の間では、“人種主義者”という非難は、人種の問題を話すのを避けるための、とても使いようのいい方便だった。“非白人”側が、現実には差別されていると感じることを、不和を生むものだとして非難することが最も大きな目的だった。人種の問題について話すことを望まない、もしくはそれを都合が悪いと思う者たちによって使われる、麻痺薬のようなものだった。(Moralez Domínguez 2006: web ページ)

としている。『キューバにおける人種問題への挑戦』では、こうした認識の

問題がより現実的な政治の問題へと敷衍させられている。

1962年に人種差別の問題と人種主義の問題が解決したと宣言したことは、理想主義と主意主義からくる誤りだった。これによって、人種問題はわれわれの社会の現実から最も回避すべき、無視すべき問題になってしまったのだ。われわれの知識人階級の相当な割合の人間がそれを無視し、扱うことに価値があるとさえ考えなかった。(…)

さらに、この人種の問題を一つのタブーに変え、すべての社会的、政治的空間から排除したところ、それについて言及することを妨げようとする社会の雰囲気が生まれてしまった。それを暴露する者たちは、イデオロギー的、政治的に抑圧された。文化の領域では何らかの形で人種問題を扱うことは続けられたが、科学として探求することは不可能だったし、何よりも書くことは不可能だった。あれらの年の政治的対立の中で、こうしたことを批判的に分析することは一当時優勢だった政治的見地によれば一キューバ人を社会的に分断することであり、レイシストか分離主義者、さもなくばその両方の人間であるという烙印をおされてしまう可能性があった。(Morales Domínguez 2008: 96)

そしてPICの研究を行うものの中では、PICが行ったことの歴史的解釈を巡って論争が起きてくる。PIC自体が争点化されるのである。歴史家のロランド・ロドリゲスは2010年に『平等主義者の反乱：1912年の有色人独立主義者の抵抗』を著した。フランス革命が進行中の1797年に思想家のフランソワ・ノエル・バブーフによって企てられた「平等主義者の陰謀」という史実から名を拝借し、新たにキューバ史におけるPICの反乱を語りなおそうという企図が示されるが、「重要なのは、今日のキューバ人が1912年に何が起きたのか知ることである」として真実の提示を目指している点も重要だ。そしてロドリゲスの論は、以下のような歴史解釈によって論争を起こすことに

なった。

はっきりしておかなくてはならない。PIC による生存権の回復の問題は、政治的問題を構成していたのであって、その解決の道はなにより政治的なものだった。かの政党は人種の平等を得るという目的があったが、この目的は、武器をとる道によっては解決することのできない問題だった。確認すべきだったのは最も強いものが勝つということで、この場合、最も強いのは政府であり、さらには、政府は合衆国による再占領を恐れる者たち全員の助力を得ることができたのだ。したがって、この道では解決されえなかったのだ。(…) 対立を醸成すべく、武器をとって恐怖を掻き立てることは、流血の事態しか招かないし、ジレンマの解決にはならなかった。ただ事態を混乱させてしまうだけだった。さらには、共和国が直面していた最も重大な問題とは、合衆国が島を再植民地化してしまうことだった。(…) 人種的平等を得るには、まずなにより完全な独立を得なくてはならなかったのは疑いがない。ワシントンの裁判所に訴えても、裁判には勝てなかったであろう。PIC が、助力を得る希望を抱いていた合衆国という場所は、希望するとしたら一番最後の土地のはずだった。しかし PIC はそのようには望まなかったし、そう思うことができなかった。(Rodríguez 2002: 357)

とし、当時の共和国による PIC の弾圧を、合衆国の介入から国を守るための防衛的行為であったと主張した。これに対し、『1912年有色人独立党員の虐殺』のカストロ・フェルナンデスは「人種主義にまつわる過去のいろいろなことが戦われている今日、この本は非常に都合が悪い」と批判し、雑誌『髭を生やした鰐 (*El Caimán Barbudo*)』の元編集長のロドリゲス・リバーラ Rodríguez Rivera は、「誤った本」という草稿を発表し、そうした解釈にいたる事実関係の誤りを数多く指摘している。(ウェブページ

<http://www.ipscuba.net/sociedad/polemica-sobre-la-conspiracion-de-los-iguales/> を参照)

そして、2012年のPIC 反乱のセンテナリオ時には、グロリア・ロランド Gloria Rolando が、映像によるドキュメンタリーという新たな手法によってキューバ史におけるPICの存在を再定義しようとした。この『一つの沈黙への声たち *Voces para un silencio*』は、「一つの沈黙」をPICの存在に対する歴史的沈黙とし、それに対し現在の歴史学者、知識人、アーティストなどが、語り、解釈し、詩的表現（ラップ）など複数の「声」をあげるという企図で作られたドキュメンタリーだ。冒頭、1924年に書かれたヘスス・マスデウ Jesús Masdeu の小説『悲しき人種 *Raza triste*』に出てくる対話が挿入される。

—ドン・プルタルコ、砲兵隊の士官には有色人が何人いますか？

—誰も。

—外交官には？

—誰も。

—領事には？

—いいかい友よ、砲兵隊も領事も外交官も、キューバ国民の真の代表なんだよ。キューバがキューバを代表してもらうために外国に送るんだ。ある種の人たちを送るわけにはいかないのはわかるだろう。

そして次のシーンでは、「セラフィン・ポルトゥオンド・リナーレス、ワルテリオ・カルボネル Walterio Carbonell を偲んで」というメッセージが表示される。前者は前述の1950年に『PICの歴史』を著したポルトゥオンド・リナーレスだが、後者は1961年に『国民文化はいかに出現したか？ *Cómo surgió la cultura nacional*』を著して以降、長い間表現活動をせず（もしくは知られず）、2005年にホセ・マルティ国立図書館がそれを再版した「幻

の作家」である。カルボネルはそこで、マルクス＝レーニン主義を革命以降の同時代の文化の評価においてラディカルに適用することを主張し、植民地主義の遺産としてのハイカルチャーを痛烈に批判、ドミンゴ・デル・モンテやサコに仮託するキューバ「正史」の語られ方をブルジョア的と徹底的に批判し、アフリカ系キューバ人の寄与を中心に歴史を再解釈することがキューバ文化の正史であると主張している。フェルナンデス・ロバイナによれば、反ソビエトの主張により教授職を追われたが、彼によればそれは「あらゆる革命の段階において歴史が示すように、不寛容、無理解があり、時として過ちと不正義が犯される」ときのことであり、「映画『莓とチョコレート』で描かれたように、当時優勢だった美的基準に反する表現によって、同性愛の芸術家が出国せざるを得なかった例もある」といった文脈においてなされてしまったことだという。

1966年1月の三大大陸会議で黒人アイデンティティとそれに付随する社会、経済、文化の問題についてパネルを持とうとしたが、当時はそうした行為が最も適切とは考えてもらえず、なぜなら当時は合衆国政府の策略、キューバ人を分断し、反革命勢力に勝利させようとする政策が、キューバとその革命の目前に常にあったのだ。(Fernández Robaina 2005: 電子ジャーナル)

つまりはカルボネルは「黒人革命」こそが革命として正統であるという立場であり、それが「国民の分断」の危険に触れるという理由で表舞台から消えた、と読める。そうであるとするならば、「沈黙」の指し示すものの中にカルボネルとその主張も入っており、それが「偲ぶ」メッセージの理由になっていることになるだろう。

『一つの沈黙への声たち』は、本論で述べてきた、90年以降にPICを再評価した知識人たち、例えばプロデュース協力としてアリーヌ・エルグの名が

あり、他にもフェルナンデス・ロバイナ、カストロ・フェルナンデスが「語る」ほか、歴史家のエドゥアルド・トーレス＝クエバス Eduardo Torres-Cuevas、フェルナンド・マルティネス・エレディア Fernando Martínez Heredia、アレハンドロ・デ・ラ・フエンテ、ナンシー・モレホン Nancy Morejón、コロンビア・カレッジ・シカゴの教授であるリサ・ブロック Lisa Brock などが綺羅星のごとく「声」を寄せている。2012年発表時に、ハバナの複数の映画館やホセ・マルティ国立図書館などで上映され、テレビ番組『La Mesa Redonda』でも放映された。

2012年のセンテナリオではまた、キューバ国立古文書の研究者ダンシエ・レオン Dansie León らが中心となり、『PIC 年表』が編まれた。またトーレス＝クエバス編集による雑誌『デバテス・アメリカーノス Debates Americanos』では「1812年-1912年 反乱の100年」という、解放奴隷ホセ・アントニオ・アボンテが主導した1812年のキューバ史上最初の黒人反乱とPICの反乱を接合する企画の特集が組まれ、実証研究もより一層の深化が見られた。

こうして、PICの反乱という歴史事象に対する「沈黙」を破る行為は、革命以降の「人種の問題」に対する「長い沈黙の期間」(Morales Domínguez 2008: 96)を破ることと同義に、そして同時に行われているのである。

最後に、上記のようなキューバの知識人たちによるPICの歴史の再解釈が、キューバの革命以降の歴史解釈と革命政府とのかかわりにおいて、どのような強度をもって行われているかを示す例を挙げたい。キューバ作家協会内に2005年に作られた非公式のワーキンググループ「キューバの色 Color Cubano」は、2008年に「アボンテ委員会(人種主義・人種差別と戦う委員会)」に改変され翌年活動が公にされた。このアボンテ委員会は、2011年に人民権力全国会議の教育委員会において「キューバの人種問題についての報告書」を提出し、「人種の問題がはじめて議会で取り上げられた」(Morales Domínguez 2012: 電子ジャーナル)。この「アボンテ委員会」の委員長であ

り、ザンビア、ナイジェリア、モザンビークやレソト大使を歴任し、キューバにおけるアフリカ文化の伝搬について実証研究を行う研究者でもあるエリベルト・フェラウディ Heriberto Feraudy は、2014年3月21日の人種差別反対国際デーに開かれた国連キューバ部会のパネルで司会を務めた。ここでは、その際に起きた「論争」について扱う。公式の文書は出されていないが、キューバ国立出版協会出身のジャーナリスト、サンドラ・アブダラーアルバレス・ラミーレス Sandra Abd'Allah-Alvarez Ramírez が運営するブログ NEGRA CUBANA TENIA QUE SER において関係者のメールが開示されている。それによれば、会議の締めくくりの言葉を述べていたフェラウディに対し、フェルナンデス・ロバイナが発言を求め、そこで行われた議論を学術関係者だけでなく一般にも広げるべきであり、また人種差別の問題を刑法上の措置の問題へと敷衍させるべきだと主張した。これに対しフェラウディは、それらの「意思の表明を挑発的行為と判断し、そうした問題は上からの、政府の方策を通して解決されるべきであるとした」(Fernández Robaina 2014: 電子ジャーナル)。以下はフェルナンデス・ロバイナがエリベルト・フェラウディに宛てた書簡である。

エリベルト、私の言葉への君の対応には、非常に驚いた。私の言葉は、私が最初の試論において PIC におけるマルティ主義の存在について書いてからずっと言い続けていることだ。そして私は国内、国外の空間における私の様々な議論を通じてそれを拡大し、豊富化してきた。(略) 私の講義や講演に来てくれた人たちは、私の言語が憎しみから来ているのではなく、もめ事の種を蒔くようなものとは異なり、愛と友愛と、犯した過ちについて歴史的、社会的に理解するものであることを知っている。それは「われわれの方法」の弁証法的結果の一つであり、「われわれの方法」は大きな意味では偉大だが、すべての真の革命において起こってきた歴史的事実として、過剰主義や教条主義とは無縁ではないのだ。(略)

歴史の知識、批判的議論をより広く、強くしようとわたしたちは望んでいる。批判的ではあるが、まだキューバに生き残っている諸悪を根絶しようとする建設的な議論だ。わたしたちは過去に犯した失策について非常に分析的になっているし、それが今日起こることがないよう、すでに乗り越えられた状況が再生産されることを妨げるのだ。(略)

誰もが知っていることだが、われわれのような社会では、真に影響のあることをしようとすれば政府の助け、制度的な助けを求めなくてはならない。(略) 政府、役人は様々な角度からこの戦いにおいて最大の影響力を持っている。なぜなら彼らは、人種主義者の行動を減じるために法を制定し、法を適用し、実効的な方策を講じる権能を持っている。人種主義者の行いに対しては、日々不満が広がっている。しかしエリベルト、人種差別の悪を根絶するために権力側から行われるべき行為、刑法を作ることは、開かれた議論を行うことと両立可能なのだ。これまであまりなかったが、これらの二つの潮流は、忘却された歴史、沈黙された歴史の知識のために、相補的に貢献することができるのだ。それは、この革命が知らしめようと努力していることそのものだ。『キューバにおける黒人』(1990)はわれわれの司令官の言葉、10年戦争の100周年の閉会式でのそれに靈感を受けて書かれた。彼は研究者や歴史の愛好者を呼んで、それまで重要視されてこなかった様々な歴史、人物、出来事を研究し、出版するように言ったのだ。(略)

我々が革命の過程全体において今まで進めてきたこととは別に、役人の、政府の方策、私たちが現実と直面している不平等を減らし消滅させようとするために取る方策と、その議論を我々の社会の内部にもたらそうという提案は、全く矛盾しない。社会政策、人種政策、いわば反人種差別政策は、そうした政策の適用を求めて不可避免的に浮かび上がってくる論争や議論と相補的である。(略) 90年代の最初に受けたインタビューで私が言ったのは、黒人問題が政治問題に変わらない限り、キューバの人種主義の問題は

真剣に研究され始めないだろうということだった。(略)

私が求める政策は、具体的な行動を必要としている。(略) 知っているように、この主題について何年も私は言い続け、人種主義だけでなくすべての人種差別に対する戦いに刺激を与えることのできる人々の注意を喚起しようとしてきた。ここ数日で私が出席した諸委員会で言ったように、私たちの憲法はわれわれに権利を与えているが、単に人種主義的なのではなく、明らかに人種差別的な行為が犯されている時に、憲法はそれを処罰し有罪にできるような仕組みを欠いているのだ。(Fernández Robaina 2014: 電子ジャーナル)

見られるように、「PIC のマルティ主義について」の見解が、現代において「権力側から行われるべき行為」の問題、政府が具体的に政策として刑法を改正することへと結び付けられている。「忘却された歴史、沈黙された歴史の知識」の回復という歴史の問題が、開かれた場で「人種問題」を扱うことと「相補的に」、革命政府の政治権力による具体的な行為へと差し向けられている。こうしたことが、「論争」として公の場で論じられているのである。これが、PIC を歴史的に再配置することによって至ったキューバにおける「人種」の議論の最前線であろう。

終わりに

革命が解決したと公的に言われてきた人種差別の問題は、経済格差の顕在化によって露見し、ついには98年、フィデル・カストロがその存在を公言するに至った。それは革命以降封印されてきた「人種問題」の議論が様々なレベルで行われる一つの契機となった。みられたように、近年のキューバでは現行の社会に存在する差別を問題化する一方、「人種問題」の議論が封印されてきたこと自体を問題化しながら、いかにして「人種問題」の議論を公共の場に広げ、歴史の上で再文脈化するかという点が極めて重要になってい

る。20世紀初頭、アフリカ系キューバ人による権利主張の運動は「分断主義」さらには「人種主義」として弾圧された。後に革命によって解決したとされていた時には、「人種の問題化」は同じように「分断主義」として抑圧されたのである。そのため、現代のキューバにおいて人種問題を論じるとき、それが何であるのかという議論と、それがどう論じられるべきかという議論、さらには論じる主体と客体、議論の枠組みを成立させている場としての国家についてまで同時に問うことが要請されることになる。ホセ・マルティ図書館研究員のフェルナンデス・ロバイナ教授、ハバナ大学教授のモラレス・ドミンゲスら知識人たちの著書や議論、キューバ作家協会内の反人種主義・人種差別委員会やキューバ文化省、さらには人民権力全国会議の教育委員会などの場所での議論に、分析対象例は数多く認められた。

翻ってみれば、「人種」がこうして複数の重層的コンテクストを持っている場所に比して、私たちの「人種」の理解は脆弱である。先述の通り私たちは「人種差別」が「人種“による”差別」なのか「人種“という”差別」なのかを明示的に理解しておらず、ともすると学術研究においても、例えば「“黒人”問題」という用語や問題設定が人種主義の認識の枠組みを継承し延命させてしまっているということ自体に気づかずにいる。ここには明らかに、「黒人」という語が持つ「翻訳」の問題があり、異なるコンテクストにおいて成立しているという共約不可能性を捨象する形で成立する「人類主義」（酒井直樹）としての人種主義が認められるのである。キューバの反「人種主義」の議論に接近するにはさらに、被抑圧者がいわば生存戦略として用いる行為主体＝エイジェンシーとしての対自的「人種」の表象と、多くは植民地主義によって世界中に播種され、西洋にとっての他者を対象化する中で構築された対他的「人種」の表象との差異と相補性、また、第三世界、被植民地という立場から定立する抵抗論としてのキューバのナショナル・アイデンティティ論における「“黒人”の主体性」と、キューバ国内で抑圧され、差別されているという問題意識から定立する「“黒人”の主体性」との差異と

相補性にも取り組まなくてはならない。いずれも、「アイデンティティの政治」や「発話の位置」といった、ポストコロニアル理論の問題項において、研究する側、発話する側が審問にかけられる難題であり、とりわけスピヴァクの言う「戦略的本質主義」が、上記文脈の研究においていかに定位できるのかについての考察も不可避であろう。本論はこうしたことを見据えた、キューバの事例研究、一地域研究の内部における出発点としたい。

文献

- Carbonell, Walterio (2005) *Cómo surgió la cultura nacional*, La Habana, Biblioteca Nacional de José Martí [1961].
- Castro Fernández, Silvio (2002) *La masacre de los Independientes de Color en 1912*, La Habana, Editorial de Ciencias Sociales.
- Conte, Rafael., Capmany, José M. (1912) *GUERRA DE RAZAS (NEGROS CONTRA BLANCOS EN CUBA)*, La Habana, Imp. Militar de Antonio Pérez.
- Danzie León, Bárbara, et al. (2012) *Apuntes Cronológicos sobre el Partido Independiente de Color*, Santiago de Cuba, Ediciones Santiago.
- De la Fuente, Alejandro (2001) *A Nation for All: Race, Inequality, and Politics in Twentieth-Century Cuba*, The University of North Carolina Press.
- Feraudy Espino, Heriberto (2015) *¿Racismo en Cuba?*, La Habana, Editorial de Ciencias Sociales.
- Fermoselle, Rafael (1998) *Política y color en Cuba: La guerrita de 1912*, Madrid, Editorial Colibrí [1974].
- Fernández Robaina, Tomás (1990) *El negro en Cuba 1902-1958*, La Habana, Editorial de Ciencias Sociales.
- (2005) “Para mi maestro, el gran Walterio,” *Librinsula: la isla de los libros*, año 2, Nro.72, 20 de mayo. (電子ジャーナル <http://librinsula.bnjm.cu/1-205/2005/mayo/72/colaboraciones/colaboraciones513.htm>) 2016年5月閲覧
- (2014) “Carta de Tomás Fernández Robaina a Heriberto Feraudy” (電子ジャーナル <http://negracubanateniaqueser.com/el-ciberdebate/heriberto-feraudytomas-fernandez-robaina/carta-de-tomas-fernandez-robaina-a-heriberto-feraudy/>) 2016年5月閲覧
- Helg, Aline (1991) “Afro-Cuban Protest: The Partido Independiente de Color, 1908-1912,” *Cuban Studies* 21: 101-21.

- (1995) *Our rightful share: The Afro-Cuban Struggle for Equality, 1886-1912*, Chapel Hill and London, The University of North Carolina Press.
- 岩村 健二郎 (1996) 「キューバ性への志向—フェルナンド・オルティスのアフロキューバ人研究—」 1995年度東京外国語大学大学院 修士論文
- (2007) 「『キューバ文化』はいかに模索されたか」『世界地理講座：第14巻ラテンアメリカ』朝倉出版、222-231頁
- (2012) 「『科学』と『人種』—F. オルティスによるキューバ初の『黒人研究』にみる知のかたち」『早稲田大学法学会人文論集』第50号、170-136頁
- 工藤多香子 (2010) 「同質性と多様性のはざまで—21世紀キューバにおける人種差別とのたたかい—」 山岡加奈子編『ラウル政権下のキューバ』調査研究報告書、アジア経済研究所、100-113頁
- Masdeu, Jesús (1924) *Raza triste*, La Habana, Imprenta y papelería de Rambla, Bouza y ca.
- Morales Domínguez, Esteban (2005) “Cuba: las metáforas del color” (電子ジャーナル http://www.lajiribilla.co.cu/2005/n231_10/231_03.html) 2016年5月閲覧
- (2006) “Algunos desafíos del color” (電子ジャーナル http://www.lajiribilla.co.cu/2006/n279_09/279_06.html) 2016年5月閲覧
- (2007) *Desafíos de la problemática racial en Cuba*, Fundación Fernando Ortiz.
- (2008) “Desafíos de la problemática racial en Cuba,” *Temas*, No. 56, pp. 95-99.
- (2012) “La Asamblea Nacional y el tema racial en Cuba,” *Habana Times. org*, 2012.12.31. (電子ジャーナル <http://www.havanatimes.org/sp/?p=77308>) 2016年5月閲覧
- Ortiz, Fernando (1906) *Hampa afro-cubana: los negros brujos (Apuntes para un estudio de etnografía criminal). con prólogo de C. Lombroso*, Madrid, Librería de Fernando Fe.
- (1910) “Las rebeliones de los afrocubanos,” *Revista Bimestre Cubana*, vo.4 (2), pp.97-112.
- (1975) *Hampa Afro-cubana: Negros Esclavos, estudio sociológico y de derecho público*, La Habana, Editorial de Ciencias Sociales [1916].
- Portuondo Linares, Serafin (1950) *Los Independientes De Color. Historia del Partido Independiente de Color*, La Habana, Ministerio de Educación.
- Rodríguez, Rolando (2010) *La conspiración de los iguales: La protesta de los independientes de Color en 1912*, La Habana, Ediciones Imagen Contemporánea.
- Rodríguez Rivera, Guillermo (2002) *Un libro equivocado*, manuscript.
- 酒井直樹 (1996) 『死産される日本語・日本人：「日本」の歴史—地政的配置』新曜社

Serviat, Pedro (1986), *El problema negro en Cuba y su solución definitiva*, La Habana, Editora Política.

スピヴァック、ガヤトリ・C (1994) 「一言で言えば…: インタビュー: ガヤトリ・スピヴァックに聞く」 (長井香里訳) 『批評空間』Ⅱ-3, 44-64頁。

Torres Cuevas, Eduardo (ed.) (2012) *Debates americanos, no.4, segunda época: 1812-1912 cien años de sublevaciones*, julio-diciembre 2012.

映像素材

Rolando, Gloria (2012) *Voces para un silencio*, Imágenes del Caribe.